

## <北条政子は夫婦別姓？>

北条政子という名は誰しも義務教育で習っただろう。言うまでもなく、北条政子は史上初の征夷大將軍（＝將軍）・源頼朝の正妻である。しかし、よく考えてみて欲しい。正妻なのに何故、「源政子」と言わないのだろうか？生徒は誰もそんな質問はしなかったし、先生も何の疑問も無く当たり前のようにそう教えてきた。頼朝が將軍になれたのは妻の実家のおかげで、妻の尻に敷かれていたから？源氏を名乗るのが嫌だった政子の単なる我が儘？

そもそも、何故こんなことをわざわざこのブログのテーマとする必要があるのか？実は、これは家制度や氏族、氏姓制度の問題で、日本の家族制度のルーツに関わることであり、天皇家にも大いに関わることなのだ。

それでは、北条政子を通じて考察しよう。

\*考察にあたり、三重テレビ放送特別番組「氏神さま」（特に第3話から5話）と、Wikipediaを参照した。

### (1) 氏姓（しせい）制度概要

氏（うじ）は血縁関係のまとまりで、氏姓制度以来続いてきたものである。支那（\*）や朝鮮半島にも同じような制度があり、古代日本は支那に朝貢していたので、日本もそれに倣ったとみなして良い。朝鮮半島の姓制度は古代支那の父系的家族制度由来のものなので、ここではまず支那の氏姓制度を見てみる。

\*支那とは大陸で初の統一国家を成し遂げた秦王朝に由来する名称で、大陸に興った王朝の総称である。これが英語では“China”となる。中国の蔑称などと中華人民共和国が日本に対して主張することがあるが、決してそのような蔑称などではない。（蔑称ならば、“China”も蔑称ということになる。）

ちなみに、しばしば「中国四千年の歴史」などと言われることもあるが、「中国」とは第二次大戦後に建国した「中華人民共和国」の略称であるため、「支那四千年の歴史」と言うのが正しい。

#### ①支那の氏姓制度（Wikipedia）

支那に於ける氏（うじ）とは、古代支那に於いて同一の先祖から出た血縁集団（＝姓）から分かれた小集団固有の名称を示した言葉である。氏にあたる各小血縁集団は、姓にあたる大血縁集団のうち、居住地や職業、一族の中の社会的序列などによって独立した集団として認識される人々である。

古代支那の氏は、「姓」と言う血縁集団の中の特定の構成員を起源として、血

統的に姓から分岐した集団と考えられる。これを民族学的に言うならば、姓が部族、氏が氏族にほぼ相当する。(集団の大きさとして、氏族<部族。)

氏の名は続柄、職掌、王朝名等に由来するが、時代が下るにつれ、次第に氏のみが名乗られるようになってきた。

## ②日本の氏姓制度 (Wikipedia)

原始共同体に於いては、氏族や部族が社会の単位だったが、氏姓制度の成立時期は、5~6世紀頃とされている。

大和王権に於いて、大王の下で有力豪族たちが氏(うじ)として奉仕し、王権を構成した。古代に於ける氏は、有力な血縁集団の家系を中心として、その周縁に血縁・非血縁の様々な者が含まれる同族団あるいはその連合体である。氏の中心的一族は大和王権と何らかの政治的関係を有し、大和王権との関係によってもたらされる政治的権力が、氏内部の統制と外部への拡大に重要な意義を持った。このため、古代の氏は当初の自然発生的な血縁集団から変貌し、大和王権と密接に結びついて成立した政治的集団または政治的組織となった。そのため、氏の名称がしばしば仕奉すべき職掌(物部氏、大伴氏、中臣氏など)を表すこととなり、王権側(天皇のことだが当時はまだ大王であって天皇という呼称は無い)が氏姓を賜与・変更する権限を有していた。つまり、**大王やその一族は氏姓を与える側だったので、氏姓は無かった。**

また、職掌以外にも地名によるもの(蘇我氏、葛城氏、吉備氏など)もあり、臣(おみ)、連(むらじ)、造(みやつこ)のような姓(かばね)を帯びた。氏姓(うじかばね)を有することは、王権の政(まつりごと)に何らかの形で関与していることを示していた。

このように、氏姓は大和王権を構成する中心的一族が称したものだだったが、6世紀には一般の民にも及んでいったものの、地方豪族の支配下にあった一般の民(百姓:おおみたから)にまでは完全に及んでいたわけでは無かった。

大化の改新後は、「甲子(かつし)の宣(664年、天智天皇3年)」により、氏姓制度による臣・連・伴造・国造を律令国家の官僚に再編し、戸籍制によって氏姓は部民(べみん=一般の民)にまで拡大され、すべての階層の国家身分を表示するものとなった。氏姓を有しない者は、天皇及び皇族と奴婢(ぬひ)のみとなった。また、従来の父系あるいは母系の原理による漠然とした氏の範囲が、父系による直系親族に限られることとなった。

そして、天武天皇の時代（684年、天武天皇13年）に「八色の姓（やくさのかばね）」が制定され、ようやく日本に於ける姓が定まった。8つの姓は真人（まひと）、朝臣（あそみ・あそん）、宿禰（すくね）、忌寸（いみき）、道師（みちのし）、臣（おみ）、連（むらじ）、稻置（いなぎ）である。実際に賜ったのは真人、朝臣、宿禰、忌寸の上位四姓で、上級官人と下級官人の関係を明確にすると共に、中央貴族と地方豪族とをはっきり区別した。

しかし、平安時代に摂関政治によって藤原氏＝藤原朝臣が政権を独占するようになると、いわゆる源・平・藤・橘の四姓のみが隆盛になり、その末裔の姓はほとんどが朝臣になってしまい、姓そのものの意味が無くなっていった。

また、律令的戸籍制度も次第に行われなくなり、10世紀になると地方豪族で実力を蓄えた者は有力な貴族の家人となり、天下の氏姓は源・平・藤・橘か、紀、菅原、大江、中原、坂上、賀茂、小野、惟宗、清原などに限定されるようになった。

## (2) 神道との関わり～氏神

このように、前提として血縁としての氏があり、姓は役割に応じていろいろな名称が異なる。**氏も姓も天皇が与えるから、天皇には氏も姓も無い。**

奈良時代までは、氏と姓で朝廷の秩序が保たれていた。万葉集に、初めて氏という言葉が登場している。そして、古代は女性も出身氏族の氏名（うじめい）を名乗った。

氏姓については古代支那の制度でも混とんとしており、日本はそれをすべて真似ることは無かった。（氏姓の意味合いは、日本ではほぼ支那と逆である。）日本で乱立する姓がまとめられたのは、天武天皇の八色の姓制度である。

さて、日本には古代から神道的な考えがあり、自然の至る所に神が存在するという考えである。そして、氏族の中で氏神という信仰が生まれた。

氏神とは、氏族＝血縁で結ばれた一族が祀る神である。古代、交通網が発展していなかったこともあり、こういった血縁の一族はほぼ同じ地域に集団で暮らしていた。そして、稲作の発展に連れて地縁が深くなり、地域の人々が祀る神となった。この「地域の人々」の中には、稲作のためにやって来た人たちも含まれるようになった。

時が下って武士が登場するようになると、頭領の下、血縁や地縁を超えた集団で戦うようになり、氏神はその旗頭としての守護神となった。例えば、武家源氏が登場する以前の儀式書に於いて、八幡神への奉幣使は公家源氏が務める

ことになっていた。つまり、公家源氏（臣籍降下した者たち）の氏神が八幡神だった。

これが初の武家政権・鎌倉幕府が誕生すると、新たな神を勧請（かんじょう\*）することとなった。幕府は初の全国政権なので、相模国一之宮の寒川神社などの勧請ではなく、武家統領である源氏の氏神「八幡神」を鎌倉に勧請して鶴岡八幡宮とした。つまり、この時点で八幡神は源氏の氏神から武門の神へ変貌したのである。時の執権・北条氏は、坂東平氏なのに頼朝の八幡神を信仰したわけだが、これは武家政治を始めてくれた頼朝信仰のためでもある。

#### \* 勧請

神の分霊を迎えて、新しく設けた社殿に迎え入れて祀ること（分祀と言う）を意味する。元々は仏教用語で、仏に願って説法をしてもらい、仏がこの世に永遠にあって人々を救ってくれるようにと請う、と言う意味。昔の日本では神仏習合により、神道に対してもこの言葉が使われるようになった。

### (3) 名字

#### ① 名字の発生

中世が始まる頃、「家」という概念が氏の中に出てきた。一族の中で所領が分かれたり、別の土地の所領に移ることなどが起きてきて、居住や領地の所有を表すために土地の名を自分の名にした。例えば、藤原氏からは近衛家、九条家、一条家という京都の通りの名から取った家が生まれていったのである。

中世になるとは戦乱などにより所領が頻繁に変化し、名字の持つ意味は低下したが、戦乱が収まって居住地が安定してくると、名字が家名・一族の名前を意味するようになり、他の国に移っても名字は変わらないようになった。

そして、名字が家や一族を表す意味合いが強くなった江戸時代には、「みょう」の漢字が「名」から「苗」に差し替えられた。「苗」という字は、支那の古典などに見られる「苗裔（びょうえい）」という言葉の「苗」に由来する。「苗裔」とは遠い子孫、末裔などの意味を持つ言葉で、ある先祖から連なる血統の人や一族を表す。（<https://99bako.com/909.html> 参照。）

このように、平安時代に地名から生まれた名字は、江戸時代には一族の繋がりという意味する「苗字」へと変化していった。

#### ② 氏と家の大きな違い

氏の論理からすれば、夫婦は血統が違うから、結婚しても別氏となる。中世

までは生まれた家の氏を名乗り続けたが、その後は次第に同居する集団＝家で同じ名字を名乗ろうとする現象が生まれた。これにより、1つの家では夫婦同姓となった。この場合の「夫婦同姓」とは「同名字」のことである。だから、民法で「氏」と記載しているのは間違いである。

また、夫婦は氏が異なるので、氏神は元々は別々だった。しかし、家が生まれてくると、同じ神を夫婦で崇敬するように変化した。氏から家という単位に変わっていくと、氏神は祖先神とは無関係な日常的に崇敬する神に変貌していったのである。

以上、氏と名字、姓はまったくの別物であり、**氏と家の最も大きな違いは夫婦関係の変化にある**。そして、今日的な意味での姓（せい）の特徴は、基本的にはこの苗字（名字）から発生しており、氏姓で言うところの姓（かばね）とは全く異なるものである。また、「氏名」という言葉にしても、氏の名を名乗っているわけではない。ならば、「姓名判断」というのは、言葉からして間違っているから当てにならない。

#### (4) 北条政子

ここまで分かったところで、ようやく北条政子についてだが、その前に北条氏について。北条氏は通説では平氏ということになっているが、いろいろ異論もある。Wikipediaに依れば、通説では宇多天皇の勅命により平姓を賜与され臣籍降下した平高望が上総介に任じられ、子の国香の長男・貞盛の四男・維衡の流れが伊勢平氏、貞盛の弟・繁盛の流れが常陸平氏、そして貞盛の次男・維将の孫である平直方の子孫が北条氏と熊谷氏とされている。

しかし、

- ・ 現在伝わる北条氏系図の中には時政以前の系譜に於いて違いを見せるものもいくつか存在すること、
  - ・ 北条氏が平氏であるならば、何故、敵方の頭領である源頼朝に味方したのかということ、
  - ・ 北条氏の家紋は三つ鱗だが、これは初代執権・時政が江ノ島弁財天に子孫繁栄を祈願したとき、美女変身した大蛇が神託を告げ、三枚の鱗を残して消えたことに因むので、本来は蛇神伝説のある三輪一族などではないかということ、([http://www.harimaya.com/o\\_kamon1/yurai/a\\_yurai/pack2/uroko.html](http://www.harimaya.com/o_kamon1/yurai/a_yurai/pack2/uroko.html))
- などから、本来は平氏ではなく、系図をねつ造したという疑いもある。

しかしながら、ここでは北条氏の本質を議論するわけではないので、通説に従って、北条氏は平直方を始祖とする、伊豆国田方郡北条（現在の伊豆の国市）

を拠点とした在地豪族、つまり、広い意味での坂東平氏と見なす。

#### ①平氏と平家の違い

しばしば平氏と平家は混同されている。平氏はたくさんいるが、平氏という氏（うじ）の中にいろいろな家が、同じ場所に一緒に暮らしている集団として生まれてきた。

桓武平氏の氏神は、京都の平野神社である。前述のように、いろいろな場所に定住して新たに家を創るようになると、その家のそばにある神をそれぞれ氏神のように崇敬し始めた。

都で権勢を振るっていたのは有名な平清盛だが、清盛を中心とした、**京都の六波羅で暮らす平氏のことを単に「平家」と言う**。だから、「六波羅家平氏」と言った方が正確である。

清盛は厳島付近を日宋貿易の拠点としようとしたので、厳島神社を平家＝六波羅家の氏神とした。（これには大阪の住吉大社、九州の宗像大社の間の海神を押さえる、という意味合いもあった。）つまり、広島のある有名な厳島神社は、あくまでも平家＝六波羅家平氏の氏神であって、桓武平氏の氏神ではない。

#### ②北条氏

前述のように、北条氏は平直方を始祖として、伊豆国田方郡北条に住んでいたから、正しくは「北条家平氏」である。しかし、都では藤原氏が繁栄し、地方に先駆けていち早く藤原の氏から家が発生したものの、地方では氏がまとまっていただけで、「家」の概念は十分に普及していなかった。また、北条の一族は、この地域に於ける坂東平氏の代名詞的存在でもあった。そのため、坂東平氏の中で北条に居た者たちが北条氏＝「北条の平氏」を名乗ったのである。

中世までは生まれた家の氏を名乗り続けたので、政子は正確には坂東平氏北条家の政子だが、この地域に於いては北条家＝北条の平氏であり、北条の平氏の女という意味での、北条政子なのである。

対して、頼朝は明らかに「源の頼朝」であって、「源氏（みなもとのうじ）の頼朝」を直接意味する。

だから、「北条」が氏であろうと家の名字であろうと、頼朝が氏を名乗っている以上、北条の政子は決して「源氏（みなもとのうじ）」を名乗ることはできない。故に、「源政子」と名乗らないし名乗れない。

仮に頼朝が幕府樹立を機として新たな家を創り、鎌倉幕府の地名に因んで「鎌倉家」などとしたら、「鎌倉頼朝と鎌倉政子夫婦」ということになる。

## (5) 天皇の氏姓

天皇は氏姓を与える側だったので、氏姓は無かった。これはトップに立つ天皇が単に臣下に対して与える存在だったから、という理由だけではない。その理由は支那にある。

その支那では、皇帝にも姓があった。初の統一国家・秦から代表的な王朝の姓を挙げる。

- ・ 秦：嬴（エイ）
- ・ 漢：劉（リュウ）
- ・ 魏：曹（ソウ）
- ・ 呉：孫（ソン）
- ・ 蜀：劉（リュウ）
- ・ 晋：司馬（シバ）
- ・ 隋：楊（ヨウ）
- ・ 唐：李（リ）
- ・ 宋：趙（チョウ）

支那の氏姓制度については(1)に記載したが、具体的な名前でも説明する。例えば、三国志で有名な蜀の「劉備玄德」という名前は次のようになる。

(<https://www.isc.meiji.ac.jp/~katotoru/stdnt-seimei.html> 参照。)

- ・ 劉：姓
- ・ 備：諱（いみな：親がつけた個人名）
- ・ 玄德：字（あざな：成人後に自分で名乗る名前）

日本にも諱はある（あった）。生まれてから付けられる名前が幼名で、元服後に与えられる本名が諱である。諱は「忌み名」とも書けるように、本人の生前に口に出すことや、人前で明かすことは禁忌とされていた。（これは、名は最も簡単な呪詛となり、本名と生年月日が分かれば呪詛できるためだと思われる。）例えば、織田信長は幼名が吉法師、信長が諱、別名（通称）が三郎、上総守、上総介、右大将、右府などで、家臣が信長に向かって「信長殿」と言うことはあり得ず、通称で呼んでいた。

(<https://intojapanwaraku.com/culture/64896/>参照。)

なお、よく似た言葉に「諡号（しごう）」というのがある。これは、王や貴人などの死後に贈られる「おくりな」のことである。天皇には漢風諡号と和風諡

号が贈られた。(以下、Wikipedia より。)

- ・漢風諡号

生前の行いを評して奉られた「○○天皇」という呼称である。奈良時代以降の慣習。天平宝字 6 年に初代・神武天皇から第 41 代・持統天皇までの 41 代の天皇及び第 43 代・元明天皇、第 44 代・元正天皇の漢風諡号が淡海三船（オウミノミフネ）によって一括撰進された事が『続日本紀』に記述されている。

- ・和風諡号

第 41 代・持統天皇以来、先帝の崩御後に行われる葬送儀礼＝殯（もがり）の一環として行われてきた。殯の場に於いて、先帝の血統が正しく継承されたことやその正統性を称揚し、先帝に和風諡号が贈られた。持統天皇から平安時代前期の第 54 代・仁明天皇まで贈られた。(一部、除く。)

だから、慣例的に初代・神武天皇の「神日本磐余彦(カムヤマトイワレヒコ)」から第 40 代・天武天皇「天渟中原瀛真人(アメノヌナハラオキノマヒト)」までも和風諡号と呼んではいるものの、必ずしも諡号だったわけではなく、諱ではないかと考えられている。

- ・例：持統天皇

漢風諡号：持統天皇

和風諡号：大倭根子天之廣野日女尊（オオヤマトネコアメノヒロノヒメノミコト）

諱：鷗野讚良（ウノノサララ、ウノノササラ）

このように、天皇にも漢風諡号や和風諡号、諱があるわけだが、何故か氏姓は無い。それには、支那の**易姓革命**（えきせいかくめい）が大きく影響している。

### ①易姓革命 (Wikipedia)

孟子らの儒教に基づく、五行思想などから王朝の交代を正当化する理論。天の神は自らの代わりとして皇帝に地上を治めさせるが、徳を失った皇帝に天が見切りをつけた時、**天命を革(あらた)めること＝革命**が起きるとされた。それを悟って皇帝が自ら譲位することを「禅譲」、武力によって追放されることを「放伐」と言う。

しかし、前王朝が徳を失ったので、新たな徳を備えた一族が新王朝を立てたというのが主流の考え方である。日本の天皇のような血統ではなく、徳を王朝



継承の根拠としている。この際、**王朝一族の姓が易（か\*）わる**こと、つまり、**皇帝一族が代わる**ことが重要ポイントである。

\*易 (<https://www.kanjipedia.jp/kanji/0000411200/>参照)

トカゲの形を象形した文字。「蜴(エキ、トカゲ)」の原字。トカゲの体色が変わることから、「かわる」意を表す。

(支那伝説の夏王朝の創始者とされるのは禹(ウ)だが、この名の文字は、古代文字の「九」と「虫」とを合わせた文字である。「九」は伸ばした手の象形で、「虫」は蛇や竜などの爬虫類の意味だから、「雄の竜」の象形となる。わざわざ「代わる」意味としてトカゲの象形である「易」を使用しているのは、この伝説の帝に由来するのかもしれない。)

さて、このような易姓革命によって新王朝が起きると、大抵の場合、前王朝とその末代皇帝の不徳と悪逆が強調され、場合によっては墓が暴かれたりした。そして、**一族郎党や前王朝支持者は皆殺しにされる**ことが多かった。

(<https://hanada-plus.jp/articles/693>)

[https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/61159/cks\\_036\\_055.pdf](https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/61159/cks_036_055.pdf))

注目すべきは、「**皇帝一族が代わる**」という事である。ここに**儒教の思想**が合わさり、**皇帝一族の利益を最優先し、公の利益を平気で損なう**という現象が発生する。王朝が特定の一族のものである以上、王朝並びにそこに所属する民衆はその一族の所有物であり、故に、民衆が皇帝一族から搾取されるのは当然、という考えとなる。だから、民衆も皇帝のために尽くして生きていこう、などとは考えない。そのため、ある程度の期間が過ぎれば民衆の不満が爆発し、次の易姓革命が勃発する、という歴史の繰り返しである。

このように易姓革命によって王朝が代わる度に、前王朝を否定するケースがほとんどだから、同時に前王朝の文化も否定され破壊される。それにより、**王朝の断絶と同時に、文化の断絶も起きる**。これからしても、一括りに「中国」という言い方をするのは誤っていると言える。

## ②天皇の氏姓

日本の氏姓制度は支那の制度を取り入れたものだが、これまで述べてきたとおり、支那の制度とは異なるものである。そして、この支那の氏姓制度には易姓革命という王朝と文化の断絶が伴っていた。そのため、**日本ではそのようなことが起きないよう、帝に氏姓を与えなかった、帝は氏姓を持たなかった**ので

ある。氏姓が無ければ、氏姓は易わりようが無い！

古事記や日本書紀を読めば明らかだが、日本でも太古、皇族同士の殺しあいの記述が見られる。どこまで真相なのかは不明だが、何らかの「事実」に基づいて書かれたのが神話だから、おそらく実際にあったのだろう。これは、天皇が政治権力を有していたためである。かつては祭政一致で、天皇が神の託宣を伺って政治を行っていた。

しかし、狭い島国でそのようなことをやっていると、いつかは王族＝皇族が滅びてしまい、支那のような、易姓革命の国になってしまう。そこで、まずは王族＝皇族の氏姓を無くし、徐々に政治権力も別の一族が握るようにした。王族＝皇族は、国の権威として存在することとなったのである。それが一応の完成を見るのは、藤原氏の摂関政治が始まった時代である。

しかし、貴族どうしが所領など財産を競い合う中で、それを守護する武闘集団が現れた。武士の登場である。そして、武士の権力が増すと同時に、貴族の権力は次第に弱くなった。それにより、武士どうしの戦いが頻発するようになり、新たに武士として最高権力を握った鎌倉殿こと源頼朝が初の幕府を開いた。

以後、武士どうしの権力争いが増し、それに対抗するため、都でも天皇が再び権力を持つようになってきた。しかし、権力を持った天皇が敗けると、島流しなどにされた。また、皇族どうしの権力争いも再発した。ここで、また王族＝皇族＝天皇の存続の危機となったわけである。（そもそも、武士ではない天皇や朝廷貴族が武士に勝てるはずもない。）そのため、戦国時代を経て江戸幕府が興ると、幕府は禁中並公家諸法度を制定し、天皇並びに天皇を補佐する貴族たちの権力を無くし、権力はすべて幕府が握った。換言すれば、政治的責任はすべて幕府が負うことになり、天皇には一切責任が無くなった。代わりに、天皇は完全に日の本の権威の存在となったのである。

これでは、天皇は羽をもがれ、手足もがんにがらめにされたようにも見える。しかし、幕府の権力が低下し、更に外国から未知の敵が日本占領のために迫ってきた時、最大の力を発揮したのが、日本国の権威としての幕末の天皇である。天皇の権威によって江戸城も無血開城し、日本も外国の植民地にならずに済んだのである。

このように、支那から氏姓制度は取り入れたものの、易姓革命が勃発しないよう、天皇が氏姓（並びに権力）を持たないようにしたことは、日本が連綿と文化と王朝を繋ぎ続けることができた最大の要因なのである。

現在に於いても、天皇は権力を有しない。政治権力は国民の代表たる国会が握り、法案を可決して法律とする。その後、法律は天皇の御裁可を仰ぐことと

なり、御署名と御璽（ぎょじ：天皇の印）の押印を頂いた後、官報に掲載され、法律が正式に効力を有するものとなり、広く国民が知ることとなる。このように、天皇の署名と御璽の押印が無い限り、法は公布されないのだが、どんな悪法であろうとも、天皇に署名と押印（＝捺印）を拒否する権利は無い。その代わりに、その法の内容に対する責任は負わないのである。このように、**天皇が日本国の権威として存在することにより、日本は君主と民が共同で統治する「君民一体」という理想的な民主主義制度が保たれている。**

#### (6) 現代の夫婦別姓問題に隠された真意

ここで記事のテーマに回帰すると、北条の血統である政子は、氏（うじ）を名乗っている頼朝の氏「源」を名乗ることはできないことはお分かり頂けたと思う。つまり、北条政子は「夫婦別姓」「夫婦別名字」ではなく、「夫婦別氏（べつうじ）」なのだ。これは当時の慣習からしても、至極当然のことである。もし、頼朝が幕府設立を機に「鎌倉家」という家を興していたら、政子も「鎌倉政子」となっていたに違いない。

さて、ここで現代に目を向けると、日本国内では盛んに「夫婦別姓」が議論されている。元々は、結婚しても働き続ける女性が増え、職場で旧姓を名乗っていた方がやりやすいということに由来している。そして、ここで言う「姓」とは、夫婦という1つの家の中に於ける「名字」を意味する。これすら、夫婦別々にしようというのが、今日に於ける「夫婦別姓」という言葉が意味するところである。

そこで、しばしば例に出されるのが、中国や韓国に於ける「夫婦別姓」である。中国や韓国では昔からずっと夫婦別姓で続いてきているので問題は無い、それに欧米では別姓が当たり前になってきている、と。しかし、現代の中国名や韓国名に於ける「姓」というのは一族の血縁を表しており、日本的に言えば「かつての氏（うじ）」に相当する。また、ヨーロッパでも歴史が長い国は慣習的に氏（うじ）に相当する名称を消すこと無く、血縁を明らかにしているケースが多い。（しかし、次第にそういった「伝統」も崩壊しつつある。）

対して現代の日本人の名前で言う「姓」は「かばね」でも「うじ」でもなく、家という単位で成立した「名字」で、ある先祖から連なる血統の人や一族を表す。現代の日本に於いて、藤原氏などの有名な氏族を除けば、大半の国民は自らの氏（うじ）を知っている人は稀だろう。つまり、**家の名字を夫婦別々にしてしまうと、後々、家としても氏としても血縁や社会に対する所属が分からなくなってしまう。すなわち、日本の家族制度の崩壊に繋がり、この点が中国や韓国と絶対的に異なる点である。**

では、**家族制度が崩壊するとどうなるか？個は独立して社会に属さざるを得なくなり、それが1つの大きな共同体社会になる**、ということ。つまり、『**共産党宣言**』に於ける「独立した個人の自由な発展が、すべての人々の自由な発展の条件となるような、1つの共同体が現れる」ということと同義なのだ！

すなわち、**夫婦別姓は制度として進んでいる、などというように問題の観点が見事にすり替えられている**のだ。これは「氏、姓、名字」の違いが良く分からないことを巧みに利用した“工作行為”に他ならない。そして、欧州に於いては「進歩的」などという言葉に踊らされ、着実に伝統的氏姓が破壊されつつある。つまり、**世界的に共産主義化に向けて動いている**のである。

旧ソ連や東欧の共産主義国が解体されたのに、何を今更共産主義なのか？欧州では、既に共産主義という言葉自体が過去のものとなっているのに。では、共産主義の本質とは何か？

- ・資本主義

個人の努力により、資本を手にすることができる。失敗すれば本人の責任。

- ・共産主義

私有財産を無くし、あらゆるものを共有化し、**あらゆる人が「平等」に暮らせる社会**を実現する。そのためには、**暴力革命をも辞さない**。

- ・社会主義

基本は「働かざる者食うべからず」なので資本主義的だが、社会インフラなどは誰もが利用できるようにする。しかし、社会主義を標榜している国々を見ても、例えば中国も北朝鮮も社会主義共和国となっているが、実質的には共産主義国家である。

ここで重要な事が隠されている。**共産主義の言う「平等」とは、実は「一部の者だけが富を独占し、他は貧しく平等」という意味**なのだ。目的を達成するための暴力を正当化するのみならず、この「平等」の真意に民衆が気づいたため、旧ソ連や東欧の共産主義は崩壊した。

資本主義は表向き堂々と資本の独占を謳っているが、共産主義はそれを隠して騙しているという点で、また、その内容的にも、人類にとって最悪の制度である。

そして、ここで言う共産主義とは、単に一国のものや旧共産圏のような「古い体質の共産主義」ではなく、**国際共産主義**のことである。旧ソ連や東欧のよ

うに国として共産化するだけでなく、地球全体を共産化しようとする主義のことである。

世界を見渡せば「夫婦別姓」問題だけではなく、LGBT 問題や人種差別問題、環境問題、歴史認識問題、そしてコロナ禍での対立等、様々な状況下で人々の対立が増加している。人々を対立させて分断し、その隙を狙って漁夫の利を得るが如く洗脳統治することが、国際共産主義の目的である。洗脳統治とは、社会とはこういうもので、それに対する個人のあり方はこうだ、というように洗脳し、ごく一部の者だけがあらゆる富と権力を手中に収め、それが人々に知られないよう、人々は「貧しく平等に」統治される、という統治である。それを達成するために、「権利」や「自由」などという言葉は巧みに利用するのだ。権利や自由の裏には大きな責任を伴う、ということを隠して。

夫婦別姓問題だけでも、ここまで垣間見えてくる。「鎌倉殿」がブームなので、北条政子を通じた夫婦別姓問題をこの記事のテーマとして挙げただけではない。

これ以上の追求は、この記事のテーマから外れることになるのでやらないが、北条政子を通じて理解した氏姓制度を基に、各自で考えて頂ければ幸いである。